

1章 コンピュータの内部事情

本章では、組み込み機器におけるコンピュータを理解する上で必要な知識を纏める。要は座学パートだ。結構内容が多いので頑張ってください（他人事）

- 1章 コンピュータの内部事情
 - 1.1 コンピュータの構成要素
 - 1.1.1 コンピュータの大まかな構成
 - 1.1.2 CPUとは
 - おまけ
 - 1.1.3 メモリとは
 - 1.2 機械語とアセンブラ言語
 - 1.2.1 コンピュータの内部表現と機械語、アセンブラ言語
 - 1.2.2 ビットとデータ表現
 - 1.2.3 2進数と10進数、16進数
 - 1.2.4 2進数と負の数（二の補数表現）
 - 1.3 命令セットアーキテクチャ
 - 1.4 仮想CPUの構成
 - 1.5 コンピュータの基本動作

1.1 コンピュータの構成要素

1.1.1 コンピュータの大まかな構成

早速だが、「コンピュータ」と聞いて何が思い浮かぶだろうか。

「パソコン」、「計算機」、「量子コンピュータ」など、色々考えられよう。

実は、Computer は Compute(計算する) -er (接尾辞「~な人」) であるから、元は 計算をする人 や 機械 を指していた。

では、そんな「コンピュータ」は、どのような部分から構成されているだろう。

「パソコン（パーソナルコンピュータ）」（デスクトップPCやノートPCなど何でも良い）を基に考えてみると、まず画面を映す「液晶ディスプレイ」、入力する「キーボード」がある。さらに、データを保存するHDDやSSDなど「ストレージ」もあるだろう。

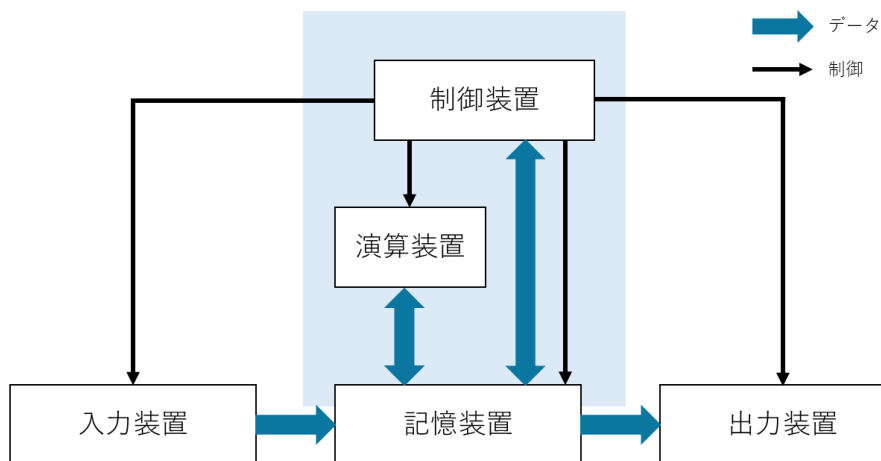
では、あとは内部に何があるだろうか。

まず、画面描画やキーボード入力、データ保存などを実際に行うために、各部分に命令を送る「制御機構」があるだろう。

そして、Computerの名の通り、計算を行う「演算機構」も備えられている。電卓とかイメージすると良い？ これらを踏まえてコンピュータの構成要素を纏めると、以下ようになる。

- 制御装置：各部に制御指令を送る
- 演算装置：計算を行う
- 記憶装置：データを保存する
- 入力装置：キーボードなど入力する
- 出力装置：画面表示など出力する

これら5つの装置を **コンピュータの5大要素** と呼び、概念図にすると次のようになる。



さて、コンピュータの構成が分かったところで、先に挙げた図を確認したい。

まず、入力装置から入力を受け取ると、入力したデータは記憶装置に入る。そして、その入力した文字だつたりを出力装置に表示する。

記憶装置は、入力データの他にも、演算結果を保存したり、制御装置が「これを記録しろ」とデータを送りつけてくることもある。

制御装置は、記憶装置からデータ呼び出して、「入ってきた値とこれを足す」や、「画面に出力しろ」といった制御を行ったりする。

よって、演算装置、制御装置と記憶装置は相互にデータをやり取りする。

図において背景色がついている部分は、パソコンなどにおける 内部 に相当する。

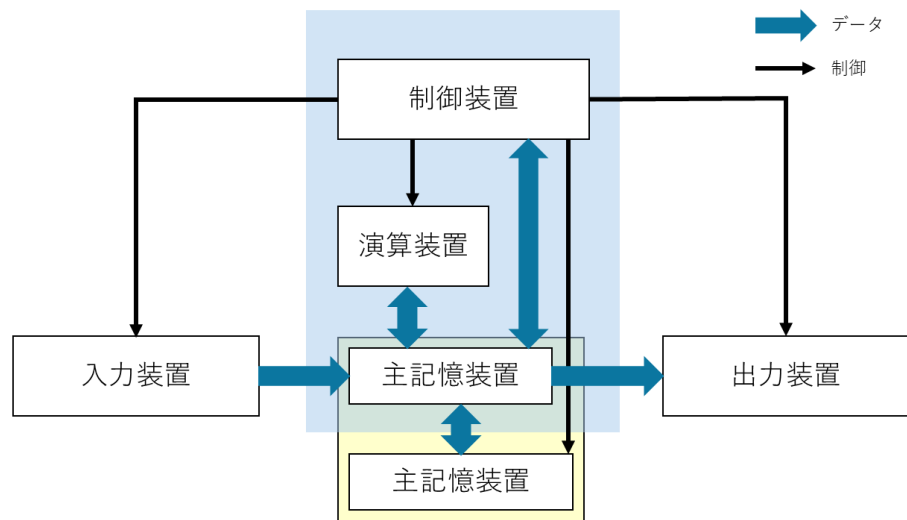
と、ここで、勘のいい人は違和感に気付くだろう。図をよく見ると、記憶装置の上半分も色づいているのだ。

実は、コンピュータの内部には 制御装置と演算装置の他に、記憶装置が入っている。

この記憶装置を、HDDやSSDといった「ストレージ」と分けるために、「メモリ」や「主記憶装置」と呼ぶ。

主記憶に対して、外付けのストレージを「補助記憶装置」と呼ぶこともある。

ということで、構成をもう少し正確に書くと、次のようになる。



1.1.2 CPUとは

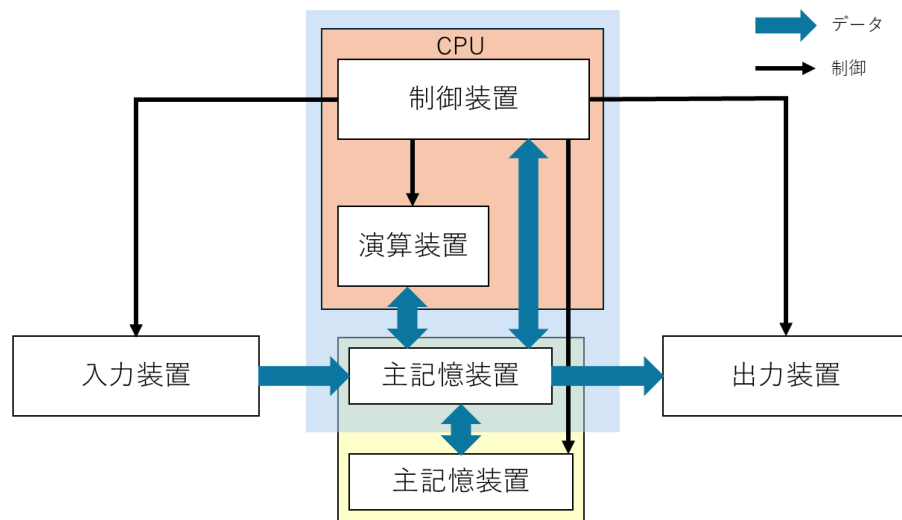
コンピュータの内部に、具体的に何をする構成要素があるかは分かった。では、実際のところ、物理的には何が入っているだろうか。

世の中には、たくさんの回路が入った「回路の集合体」（集積回路; IC）とした部品が存在する。

このICは、板に張り付けられICチップとして、今日では様々な機器に組み込まれている。

コンピュータにもそんな回路の集合体があり、**CPU** と呼ぶ。中央演算処理装置（Central Processing Unit）の略称であり、名前の通り 演算 と 処理 を行う。構成要素でいうところの、制御装置と演算装置が合体したものだ。

制御装置を積んだ 司令塔 であるCPUは、コンピュータの頭脳などと呼ばれることもある。



おまけ

「パソコンとかならいろんな作業するからわかるけど、特定の作業しかしない機械にIC使う？」という疑問が聞こえてきた気がしたので答えておこう。これは組み込み系エンジニア向けの教材であるから、組み込みのお話から。

もともとは、それぞれの機械に適した 必要な制御回路 だけが作成され、機械に組み込まれていた。炊飯器なら米炊く機能と保温する機能を持った回路を作って、それを機械に埋め込む、みたいな。しかし、これでは機械とその回路を両方開発する必要があり、パーツや期間・費用などの観点から、量産や新規開発において負担が大きかった。

そこで、色んな作業が出来る「汎用的な回路」を作成し、それを使いまわすことが考えられた。これなら回路は同じものを使えるため、生産が早く進む。掃除機や冷蔵庫や炊飯器など、機械のガワを作成して回路と繋げば、同じ回路を使いまわせる。

しかし、汎用的な回路は、専用の回路より 使わない無駄な部分 を積んでいるため、部品が大きくなってしまふ。そのため、昔は変わらず必要な制御回路用の専用ICを作ることが多かった。

時代が進み、回路部品の小型化が進んだことで、汎用的な回路も小さく作れるようになり、専用ICの利点が減った。

ということで、汎用的な回路を使いまわして、制御用の手順を内部に組み込むタイプが覇権を握った。汎用的な回路の集合体ICと、制御用の手順を組み込んだメモリ、入出力用のピンをまとめたチップを、「小さいコンピュータ」ということで **マイコン** と呼ぶようになった。

今の組み込み系は、そんなマイコンに書き込む制御を作る。そのため、マイコン、もといコンピュータの仕組みを理解することで、より効率的に物が作れるというわけだ。

1.1.3 メモリとは

メモリには、コンピュータを制御するための手順が入っていたり、一時的なデータの保存をするために使われたりする。

手順はコンピュータの中で常に同じであるから、内蔵してしまえばいいと納得できるだろう。勝手に改変されても困るので、読み込みだけできるメモリ、 **ROM (Read Only Memory)** と呼ぶ。

また、一時データは、右クリックや Ctrl+C でコピーを行った内容であったり、保存を行っていないメモ帳の落書きなどが置かれる。

このデータは電源が入っている間しか生きられない一時的なものであるから、パソコンの電源を一度落としてしまえば、「電源落とす前にコピーしたデータ貼り付けたいな」と思っても、既に消えてしまっており出来ないのである。

こちらのメモリは、 **揮発性メモリ** や **RAM (Random Access Memory)** と呼ばれる。

そんな一時的なメモリに作業中の進捗を保存しておき、「保存ボタンを押す」などをトリガーに、内容をストレージへまとめて一気に保存する。

なんですぐストレージに書き込まないのかというと、単純に時間がかかるからだ。ストレージは容量が大きい分、空きを見つけたりデータを探すのに時間がかかる（メモリと比べて1000倍以上の時間を要する）。

「何かするたびに処理がカクカクする」となっては困るので、容量が小さい代わりに比較的高速なメモリに、細かい変更を貯めこんでおくのだ。

メモリのイメージとしては、先頭から連番のついた、更衣室や駅のロッカーのような、縦並びの箱である。この一つ一つに、データや命令を詰め込める。

「10番のロッカーに入った物を取り出したい」「30番にこのデータ入れといて」といった形で、番号を指定してロッカーを扱う。

この、ロッカー番号を **アドレス** や **番地** と呼ぶ。つまり住所ですね。

番地は 0番 から始まる。先頭は1番目ではなく0番目であることに注意したい。

下の図だと、「0番地に2457が入ってる」、「1番地に6751が格納されている」といった表現がされる。ロッカーの大きさは機械によって異なるが、ロッカー自体の大きさと、ロッカー自体の数がメモリの容量に直結する。

アドレス	メモリ
0番地	2457
1	6751
2	32
3	A
4	426
5	B
6	C
7	7428
⋮	⋮

また、メモリには4つの領域が存在し、それぞれ役割が異なる。以下に、それぞれの名称と役割を示す。

- **テキスト領域**：機械語が記されている。これを上から順番に読んで、実行していく。
- **静的領域**：プログラム作成時に宣言されている、初期値がある変数に割り当てる領域。「この箱にはこれを入れるよ」が決まっている。
- **ヒープ領域**：「大きめの保存領域が欲しいよ」みたいなときに、動的に割り当てられる領域。出現した順に置かれていく。
- **スタック領域**：プログラム作成時から宣言されているものではなく、「ここでしか使わない」変数に対する領域。メモリの一番後ろから、前の方に上ってくる。

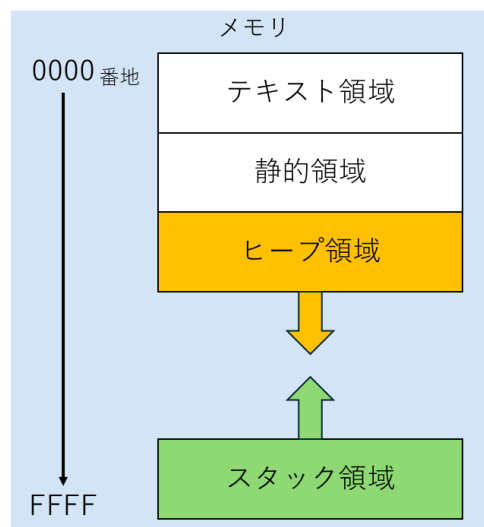
難しい用語が色々出てきたので、簡単に話します。

まず、「これをしてね」「次はこれを動かしてね」といった処理を順番に記した場所があります。これを上から順番に読んで、その通りに動かすことで、コンピュータは動作します。

次に、「この動作するために絶対必要なデータ」を保存する、動かしてる途中で大きさが変わったりしない（**静的**）場所があります。

その下に、途中で大きさが変わったり（**動的**）、急に大きい保存場所が欲しくなった時に使う場所があります。「名簿表使いたいから、中のデータ入れられるだけのまとまった場所をくれ」「やっぱこのデータも入れるから領域大きくして」みたいな、動的に変動する、まとまった場所を確保する場所です。

最後に、「この処理するときだけ使う、ちょっとしたデータ」とか、命令の順番が変わったときの戻り先とかが保存される場所があります。これは今までとは違って、一番後ろから前に進んでいきます。下から上に積み上げていくので、「スタックを積む」と表現したりします。



問題

- (1) メモリにおいて、データを格納する一つ一つの場所を指す番号を何というか。
- (2) 前のページにあるメモリの図について、A が格納されている (1) は、いくつか。

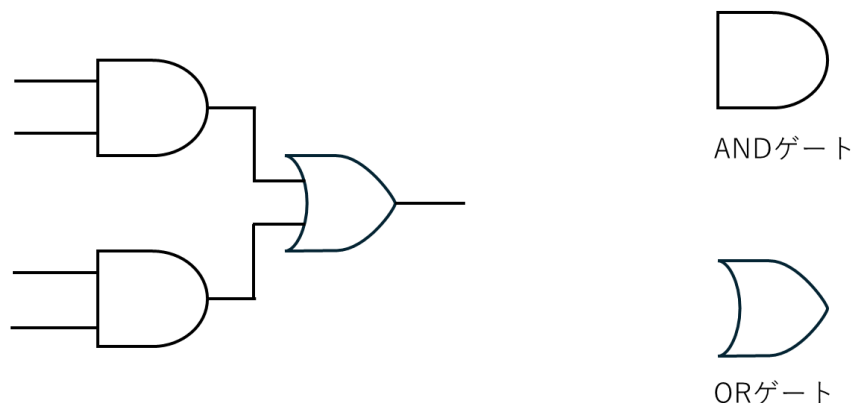
1.2 機械語とアセンブラ言語

1.2.1 コンピュータの内部表現と機械語、アセンブラ言語

コンピュータは電気で動く電子機器である。つまり、「電気が流れている」「電気が流れていない」の2状態しか扱うことが出来ない。

制御装置は、コンピュータの各部分に「電気を流す」「電気を流さない」を制御することで、望んだ操作が出来るようにする。

「ここここに電気を流せば、この回路が動くから足し算が出来る」みたいな感じで、複雑にオンオフを切り替えるのだ。



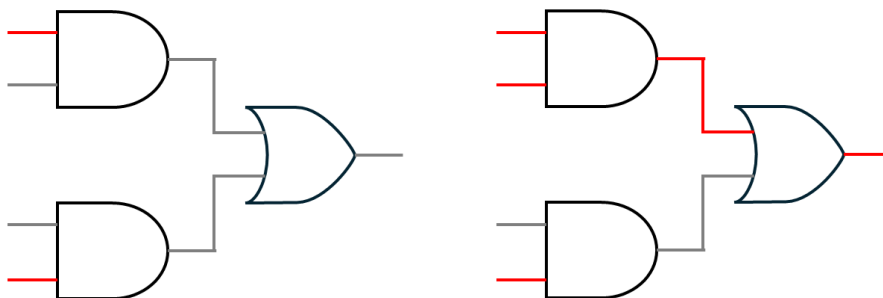
上の図において、4本の線が左側から来ており、中央にはよくわからない図形、右側に1本の線が伸びている。

線は電気を流す銅線であり、左側から電気を流して、中央で処理して、最終的に電気を右に流すか、流さないかを決定する。

中央左側にあるかまぼこみたいなやつは ANDゲート と呼び、「全部の線からの入力がON (電気が流れている) とき、電気を流してあげるよ!」といった処理をする。

また、右側のかまぼこだけど先がとがってるやつは ORゲート と呼び、「入力がどれか一つでもONなら、電気を流してあげるよ!」といった処理をする。

この状況において、左側のどこに電気を流すか、2パターン考えてみよう。



左の図では、一番上と一番下に電気を流した。この場合、どちらも ANDゲート でOFFが出力されるから、最終的に電気は流れない。

右の図では、さらに上から2番目に電気を流した。この場合、上の ANDゲート でONが出力されるから、次の ORゲート もONとなり、最終的に電気が流れる。

このように、コンピュータは電気の流し方で、「どの回路に電気が流れて動作するか」を制御する。これを行い、どこに電気を流すかを決定する回路が 制御装置 であり、「どこに電気を流すか」の指示書が ROM に記されている。

ROM では、各電線に電気を流すか、流さないかを記録しておくので、流す→1, 流さない→0 と表現すれば、電線の順番を決めて01の羅列を記せばいい。

そのため、コンピュータの内部では、データは全て 1 と 0 の2種類を組み合わせで表現される。

1 と 0 の組み合わせにより記された、制御を行うための手順を **機械語** と呼ぶ。機械が理解できる言語なので機械語だ。しかし、これでは人間に理解できない。手順を作ってデータとして組み込むのは人間なのに、肝心の人間が理解できなければ意味がない。

そこで、機械語と一対一で対応した言語を作ることにした。これを **アセンブリ言語** と呼ぶ。

本教材では、このアセンブリ言語を学ぶことで、コンピュータへの理解を高めたい。

1.2.2 ビットとデータ表現

前節で出てきた、「1 と 0 の組み合わせ」によるデータの表現を、**2進数** や **ビット列** と呼ぶ。

0 と 1 で構成された文字列の、一つ一つを **ビット (bit)** と呼び、そんなビットが列になっているから、ビット列である。

そして、8個のビットでまとめた単位を **バイト (Byte)** と呼ぶ。10100000 や 00010001 など「8ビット」や「1バイト」、11110000 10110011 を「16ビット」や「2バイト」と数える。

ストレージの容量なんかで、「ギガバイト GB」やら「2TB」などといった表現がされるが、その「バイト B」である。

キロメートルkm の「キロ」が 1000 を表すように、1KB は 1000B ということである。そんな 1KB が 1000個あって、1000KB = 1MB になる。同様に、1000MB = 1GB、1000GB = 1TB である。つまり 1TB は 1兆バイトです。デカすぎ。

ちなみに、1000 区切りではなく 2^{10} (1024) を基準にすることもある。1024B = 1KB といったように。

この場合、上の単位系と混同しないように、KB ではなく KiB、MB ではなく MiB など、間に i を入れた書き方をすることもある。

さて、実際のところ、そんなビット列でデータをどのように表現しているのだろう。

これは非常に単純なもので、「データの一つ一つに対応する番号を割り振る」のだ。

アルファベットを書きたいなら、a から z まで 26 文字あるから、00000 から 00001, 00010, ..., 11010 までに対応させる。

対象のコンピュータ、空間の中で統一された対応表があれば、一対一に対応しているから一意に復元できる。

そういうことで、世界的に統一された「文字とビットの対応表」が存在する。

文字コード と呼ばれ、「この文字はこのビット列だよ」が取り決められている。

文字コードにも unicode や Shift-JIS, ISO-2022-JP などたくさん種類があり、文字コードが違くと復元結果が変わるので、文字化けが発生したりするのだが.....。

例えば、

unicode だと「あ」は 11100011 10000001 10000010 というビット列になる。

Shift-JIS だと「あ」は 10000010 10100000 というビット列になり、全然違う。

Shift-JIS で 11100011 10000001 10000010 を読もうとすると「縋」になってしまう。

そのため、「unicode でビット列に変換したものを Shift-JIS と思って元に戻す」などを行うと文字化けする。

次のページに、今回使用する文字コード「asciiコード」を紹介する。

行 \ 列	2	3	4	5	6	7
0	間隔	0	@	P	`	p
1	!	1	A	Q	a	q
2	"	2	B	R	b	r
3	#	3	C	S	c	s
4	\$	4	D	T	d	t
5	%	5	E	U	e	u
6	&	6	F	V	f	v
7	'	7	G	W	g	w
8	(8	H	X	h	x
9)	9	I	Y	i	y
10	*	:	J	Z	j	z
11	+	;	K	[k	{
12	,	<	L	\	l	
13	-	=	M]	m	}
14	.	>	N	^	n	~
15	/	?	O	_	o	削除

表の見方は、列→行 の順番で数字を当てはめる。例えば、
20 が「間隔」（半角スペース）に対応する。
41 が 大文字の A に対応する。

といったようになる。

なぜ 0 ~ 15 なのかは、次節の 16進数 が関係する。

1.2.3 2進数と10進数、16進数

私たちが普段使用している数字は、10進数 と呼ばれる。0 ~ 9 の数字を使い、10を基準に桁が上がるから、**10** で桁が **進む数** である。

それに対し、先で話しているビット列は、0 と 1 しかないので、2を基準に桁を上げる **2進数** である。

2進数と10進数は相互に変換が可能であり、2進数から10進数は以下のように求められる。

各位の数字が a_i である二進数について (1011 なら $a_1 = 1, a_2 = 0, a_3 = 1, a_4 = 1$)

$$\begin{aligned} a_1 a_2 \cdots a_n &= \sum_{i=1}^n a_i \times 2^{n-i} \\ &= a_1 \times 2^{n-1} + a_2 \times 2^{n-2} + \cdots + a_{n-1} \times 2^1 + a_n \times 2^0 \end{aligned}$$

数式が出てきて拒否反応が表れた方もいると思うので、簡単に10進数で話をします。

まず、1024という数字は、一の位や十の位など、それぞれの位の数字と、基準となる10を使って、次のように表現できます。

$$\begin{aligned} 1024 &= 1 \times 10^3 + 0 \times 10^2 + 2 \times 10^1 + 4 \times 10^0 \\ &= 1 \times 1000 + 0 \times 100 + 2 \times 10 + 4 \times 1 \end{aligned}$$

お金のイメージです。1000円が1枚と、10円が2枚と、1円が4枚 みたいに、桁ごとに「基準が何個あるか」を見ます。

同様に、917235は、以下のようになります。

$$\begin{aligned} 917235 &= 9 \times 10^5 + 1 \times 10^4 + 7 \times 10^3 + 2 \times 10^2 + 3 \times 10^1 + 5 \times 10^0 \\ &= 9 \times 100000 + 1 \times 10000 + 7 \times 1000 + 3 \times 100 + 2 \times 10 + 5 \times 1 \end{aligned}$$

このように、数字は「それぞれの位の数字と、基準 を何回掛けている(何桁目)か」で表現できます。

そのため、2進数についても同じように考えてあげると、

$$\begin{aligned} 1011 &= 1 \times 2^3 + 0 \times 2^2 + 1 \times 2^1 + 1 \times 2^0 \\ &= 1 \times 8 + 0 \times 4 + 1 \times 2 + 1 \times 1 \\ &= 11 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} 100110 &= 1 \times 2^5 + 0 \times 2^4 + 0 \times 2^3 + 1 \times 2^2 + 1 \times 2^1 + 0 \times 2^0 \\ &= 32 + 4 + 2 \\ &= 38 \end{aligned}$$

というように、2進数から10進数が得られます。

なので、「各位の数値について、2 の (桁目-1)乗 したものを足す」ことで、2進数から10進数に変換できるというわけです。

また、逆向きには、「2の乗数の組み合わせに分解する」ことで、表現が得られる。

$$\begin{aligned} 495 &= 256 + 128 + 64 + 32 + 8 + 4 + 2 + 1 \\ &= 1 \times 2^8 + 1 \times 2^7 + 1 \times 2^6 + 1 \times 2^5 + 0 \times 2^4 + 1 \times 2^3 + 1 \times 2^2 + 1 \times 2^1 + 1 \times 2^0 \\ &= 11101111 \end{aligned}$$

しかし、これでは、同じ数を表すにも、2進数と10進数で全然違う値になってしまう。関係性が見えづらくて、計算しなければ変換しづらいのだ。

そこで、2進数を基準に、「2進数の4桁を対応させた新しい数字」を作る。これは、2進数5桁目で桁上がりするから、 $2^4 = 16$ が基準な **16進数** と呼ぶ。

とはいっても、私たちの知っている一桁の数字は0～9までの10個しかない。

なので、16進数では、0～9, A, B, C, D, E, F で値を表現する。

10進数で言う10をA, 11をBといったように対応している。

なお、16進数であることを分かりやすく書くために、先頭に `0x` や `#` を書くことがある。 `0x21` とか `#1BF6` とか。

この16進数を使って、2進数を変換すると、

`1010 0110` → `0xA6`

`0011 0101` → `#35`

といったように、4桁ずつそのまま値が対応する。

16進数から2進数は特に「35だから $3 \rightarrow 0011$, $5 \rightarrow 0101$ で `00110101` だな」といったように、すぐに変換が出来る。計算が要らない。

そのため、機械語などコンピュータの中身を表現する際は、10進数より「内部は2進数、人間が読むときは16進数」といった棲み分けをすることが多い。

ここの内容難しいので、例題と問題を用意しておきます。10進数と2進数・16進数の相互変換が一回は出来てみてほしい.....。

123 を 8桁の2進数 に直しなさい。また、これを16進数に直しなさい。

ただし、 $2^0 = 1$, $2^1 = 2$, $2^2 = 4$, $2^3 = 8$, $2^4 = 16$, $2^5 = 32$, $2^6 = 64$, $2^7 = 128$ である。

解答

まず、2の累乗の組み合わせに分解する。

大きい数から考えると、まず 64 が使えそう。

123 から 64 を引くと、59 になるから、残り 59 を同様に 2の累乗 で表したい。

59 には 32 が使えそう。残りは $59 - 32$ で 27 になる。

27 には 16 が使えそう。残りは $27 - 16$ で 11 になる。

11 には 8 が使えそう。残りは $11 - 8$ で 3 になる。

3 には 2 が使えそう。残りは $3 - 2$ で 1 になる。

1 には 1 を使える。残りが 0 になったので、

123 は $64 + 32 + 16 + 8 + 2 + 1$ で表せることが分かる。

これを累乗に直して、 $123 = 2^6 + 2^5 + 2^4 + 2^3 + 2^1 + 2^0$ となる。

空いている 2^2 と、8桁にするので 2^7 のところには 0 が入る。

よって、二進数に直すと `01111011` となる。

また、これを16進数に直すには、4桁ずつ対応を考えるので、

`0111` は 7、`1011` は B より `0x7B` となる。

問題

(1) 173 を 8桁の2進数と、16進数に直しなさい

(2) `01001011` を 10進数に直しなさい

1.2.4 2進数と負の数（二の補数表現）

さて、コンピュータ上で正の数表現する方法はわかったが、では負の数はどのように表現しよう。コンピュータには0と1しかないから、「マイナス」を意味する記号は存在しない。そこで、「一番左のビット（最上位ビット）」を**符号ビット**とし、「ここが0なら正の数、1なら負の数」といった解釈を行う方法を考えてみよう。

たとえば、1は0001なので-1は1001、2は0010なので-2は1010、といった感じである。しかし、これでは足し算を行うときに不都合が生じる。

例えば、 $1 + (-1)$ は0なので0000になってほしいが、上の方法では $0001 + 1001$ で1010になる。これでは不便なので、足し算で都合が良くなるように逆順でマイナスを割り振っていく。

0000を基準に、1は0001、-1は1111、2は0010、-2は1110、といったように割り当てる。こうすると、符号違いの同じ数を足したときに、結果が必ず10000になるのだ。

この方式で負の数を実現する表現方法を、**二の補数表現**という。

補数とは、「元の数と足した結果が、基準となる数と等しくなるような数」である。

60の「100の補数」なら、「60と足した結果、基準100になるような数」なので40である。

これで考えると、正直 二の補数 というより「2のべき乗の補数」といった方が正しい気がするが.....。

補数を用いない普通の2進数を、マイナスの符号を考えないという意味で **符号なし** 2進数と呼ぶ。

この方法では、 $0 \sim 2^{(\text{桁数})} - 1$ までの整数を表現できる。

それに対し、負の数を扱える2進数を、マイナスの符号を考えるという意味で **符号付き** 2進数と呼ぶ。

この方法では、最上位ビットが符号になるから、実質的に数字を表現するのは (全体の桁数 - 1) 桁である。

よって、表現できる整数の範囲は $-2^{(\text{桁数}-1)} \sim 2^{(\text{桁数}-1)} - 1$ となる。

2の補数表現で負の数を表すには、以下の手順を踏む。

- 1. 普通の正の数でのビット列を考える。例えば4を4桁で 0100 と表す。
- 2. これに、0と1を反転したものを考える。0のところを1に、1のところを0にする。 1011
- 3. 1を足した値を考える。桁上がりに注意。 1100

これで、2の補数表現による-4が完成する。普通の二進数、ビット反転、+1という手順だ。

2進数	16進数	符号付き	符号なし	2進数	16進数	符号付き	符号なし
0000	0	0	0	1000	8	8	-8
0001	1	1	1	1001	9	9	-7
0010	2	2	2	1010	A	10	-6
0011	3	3	3	1011	B	11	-5
0100	4	4	4	1100	C	12	-4
0101	5	5	5	1101	D	13	-3
0110	6	6	6	1110	E	14	-2
0111	7	7	7	1111	F	15	-1

問題

- (1) 二進数8桁で-20を表現せよ。ヒント：通常の20は 00010100 である。
- (2) 10000110 は、符号なし二進数でいくつか。また、符号付き二進数でいくつか。

1.3 命令セットアーキテクチャ

機械語やアセンブラ言語といっても、実は様々な種類が存在する。

というのも、コンピュータを作る会社は一つではなく、さまざまな会社が自分の都合のいい命令や仕様を作っている。

コンピュータによって、電線の組み合わせ方も、内部に入っている回路の順番や種類も異なる。そのため、同じアセンブラ言語を適用しても、電気の流れ方が全然変わってしまう。

そのせいで、世界的に統一した規格が作られなかったのだ。

世の中には、様々な会社による規格が存在する。それらを分類するため、CPUの論理的な構成を **アーキテクチャ** と呼び、分類を作った。

「こうすればこう動く」、つまり、どのような機械語で特定の動作をするか、による分類を **命令セットアーキテクチャ** と呼び、例えば以下のような命令セットとCPUの実装例がある。

- x86 (Intel社のCoreシリーズ, AMD社のRizenシリーズ)
- ARM (Apple社のA/Mシリーズ)
- RISC-V (EsperantoTechnologies社のAIプロセッサ)

本教材では、情報処理技術者試験の問題の中で扱われる仮想的なコンピュータである **COMET II** および、COMET II に対応した命令セット、アセンブラ言語である **CASL II** を基に、（それを拡張した）仮想的なCPUを使ってアセンブラ言語を学習する。

1.4 仮想CPUの構成

この仮想CPUは、命令とデータをメモリの中に内蔵する **プログラム内蔵方式** であり、命令を上から順番に実行する **逐次制御方式** を採用している。

また、このようなプログラム内蔵方式かつ逐次実行方式を採用したコンピュータを、この方法を提唱した数学者の名前から、**ノイマン型コンピュータ** と呼ぶ。

と、堅く言ってもわかりづらいので、要するに「実行する前にやりたいことと使うデータを全部書き込んで、それを順番に実行するよ」ということだ。

当たり前じゃんといったところだが、実は最近話題の量子コンピュータは、非ノイマン型のコンピュータである。

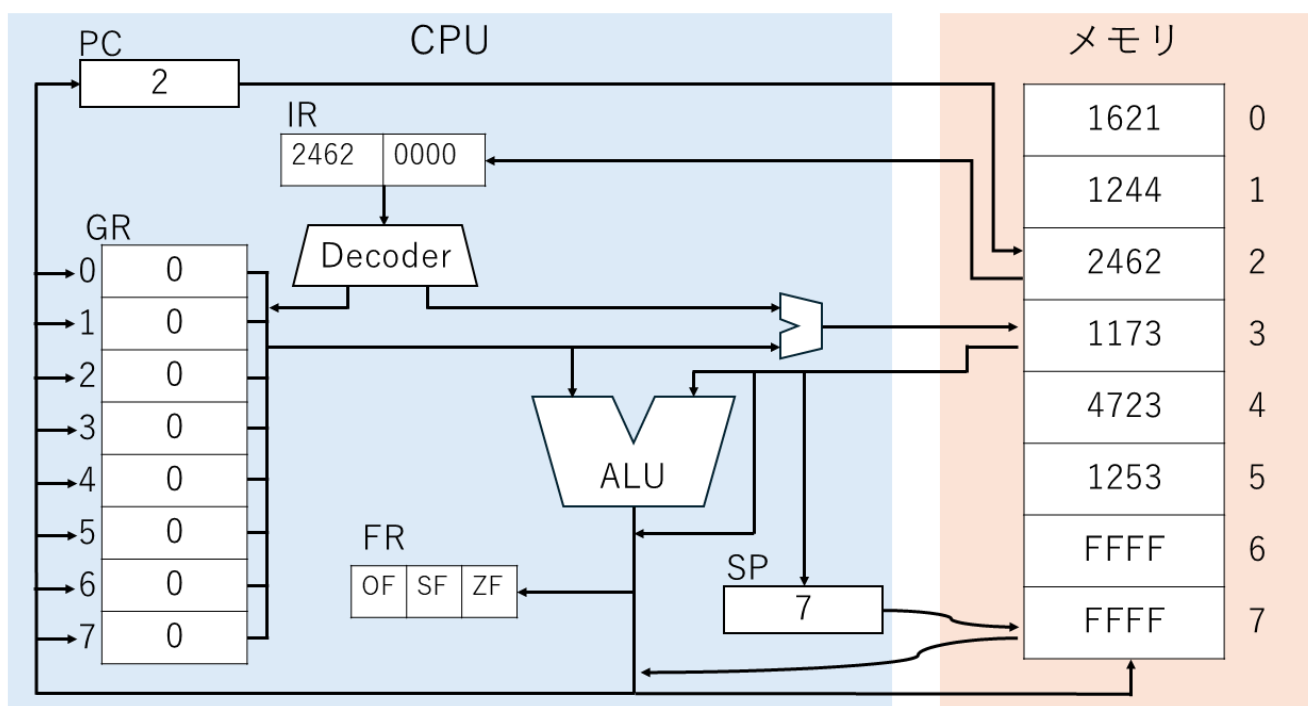
この仮想CPUは、以下の要素で構成されている。

- PC プログラムカウンタ (次に読み出すべきメモリのアドレスを保持する)
- IR 命令レジスタ (命令を保持する)
- GR 汎用レジスタ (計算結果とかデータとかを保持しておく)
- FR フラグレジスタ (数値に応じて変わる。「今読み込んだ値は負の数!」「計算結果が0!」とか)
- SP スタックポインタ (スタック領域の先頭であるアドレスを保持する)
- メモリ (各16ビット、0 から 65535 番地まで 65536個の領域がある)
- ALU (Arithmetic Logic Unit; 算術論理演算器 の略。演算を行う演算装置のこと)

フラグレジスタには、以下のフラグが 1ビットずつ存在する。

- OF (オーバーフローフラグ) 値が大きすぎたり小さすぎて表現できなくなった場合に、1となる
- SF (サインフラグ) 値が 負の数 になった場合に、1となる
- ZF (ゼロフラグ) 値が 0 になった場合に、1となる

なお、COMET II では通常、プログラムカウンタのことを「プログラムレジスタ PR」と呼ぶが、本CPUでは PC とする。



1.5 コンピュータの基本動作

ノイマン型コンピュータは、大きく分けて、次の3つを繰り返して動作している。

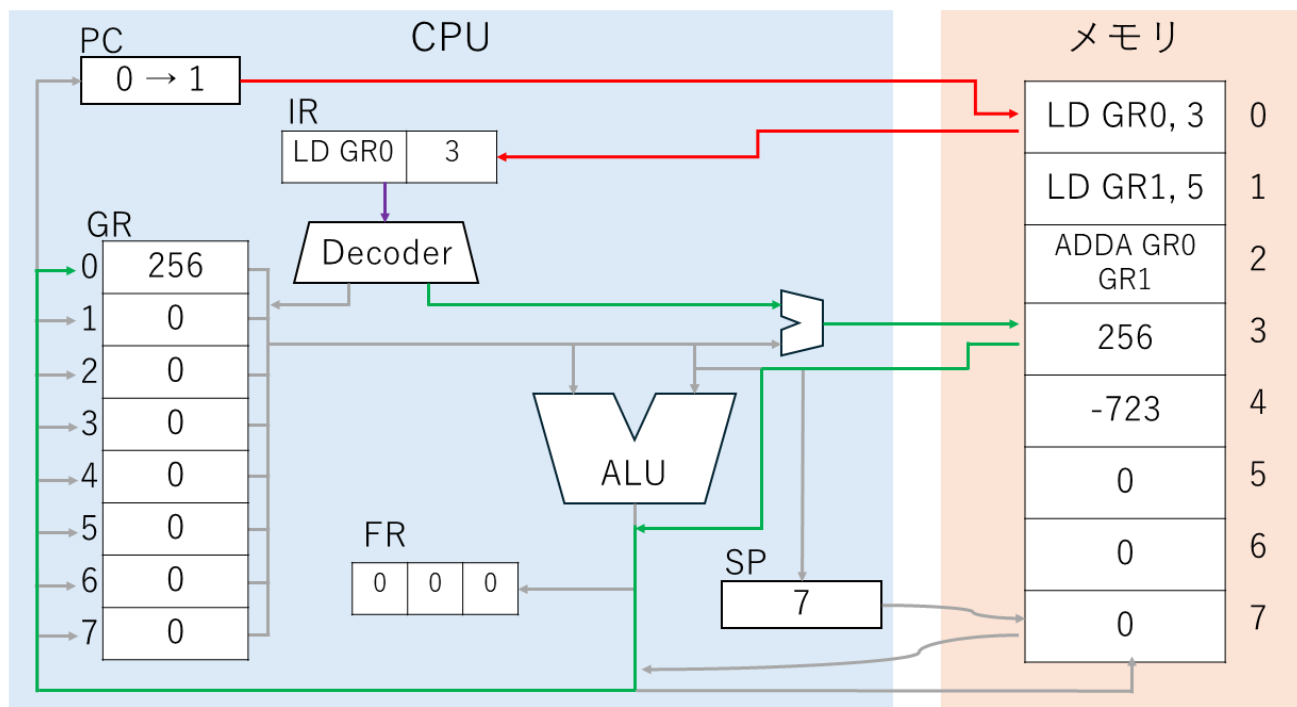
1. fetch（フェッチ）：PCの値を参照し、それをアドレスとしてメモリの中身を IR に保存する。そして、PCの値を増やす。
2. decode（デコード）：IRに入った命令を解読する。
3. execute（実行）：解読した結果に基づき、どのような処理をするか制御装置で逐次制御する。

これを繰り返すことで、「メモリに書かれた命令を上から順番に読み実行する」逐次制御方式を実現する。

例えば、メモリからデータを読み込んで、汎用レジスタ0に保存する場合、次のように制御とデータが流れる。

fetch を 赤色、decode を 紫色、execute を 緑色 でそれぞれ色分けしてみた。

赤 → 紫 → 緑 の順番で処理が行われる。



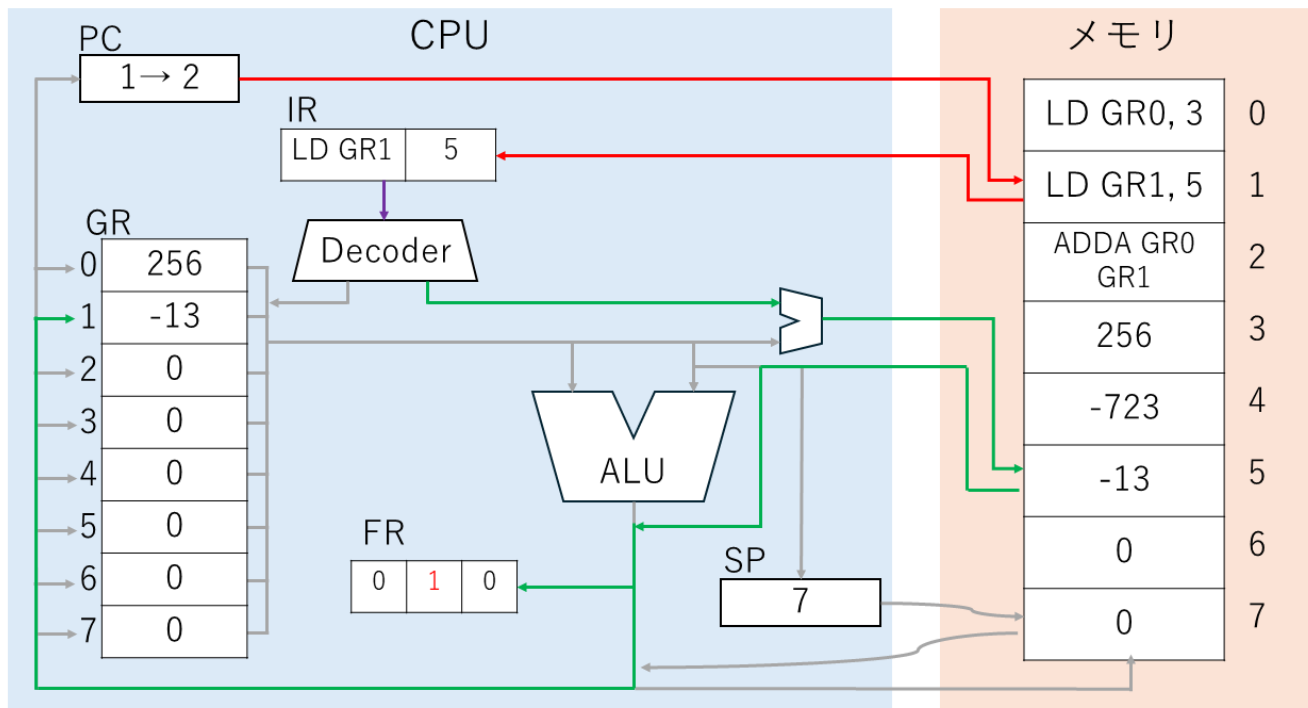
まず、（赤色の処理）PCの値を参照して、0番地の命令をIRに読み込む。そして、PCの値を増やす。

次に、（紫色の処理）デコーダーに命令を渡し、解読を行う。

解読結果から、どの回路を動かすか決定し、処理を行う（緑色の処理）。今回はメモリの3番地に入ったデータをGR0に格納する。

そして、これが終われば、またPCの値を参照して命令を読み込む。.....といったように処理が続く。

次の命令も続けて見てみよう。



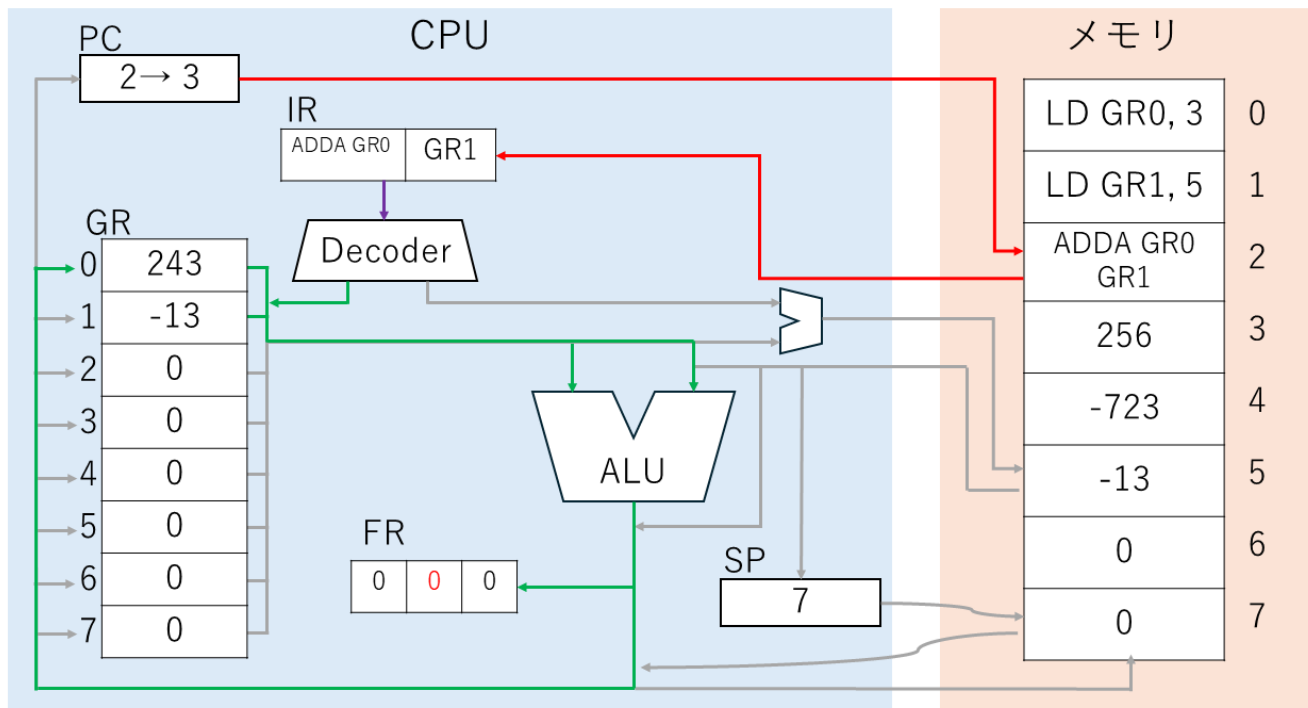
PCの値を参照して、1番地の命令をIRに読み込む。そして、PCの値を増やす。

次に、デコーダーに命令を渡し、解読を行う。

解読結果から、どの回路を動かすか決定し、処理を行う。今回はメモリの5番地に入ったデータをGR1に格納する。

ここで、GR1に読みだした値が 負の数 だったため、SFが1になる。

そして、これが終われば、またPCの値を参照して命令を読み込む。.....といったように処理が続く。



PCの値を参照して、2番地の命令をIRに読み込む。そして、PCの値を増やす。

次に、デコーダーに命令を渡し、解読を行う。

解読結果から、どの回路を動かすか決定し、処理を行う。今回はGR0の値とGR1の値を足して、GR0に格納する。足す操作はALUにて行う。

結果、 $256 + (-13)$ により、GR0の値は 243 に変わった。

そして、これが終われば、またPCの値を参照して命令を読み込む。.....といったように処理が続く。